荒牧町だより
第１４６号
荒牧町自治会
広報委員会

納涼祭

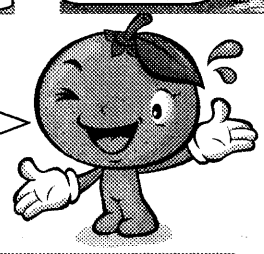
８月２日（土）、下宿公園にたくさんの人々が集まり、子ども神輿に始まり抽選会まで、楽しいプログラムに乗って、踊り、飲み、食べ、おしゃべり、遊びなど、町民がにぎやかにふれあいながら、真夏の一夜を大いに楽しむことができました。

納涼祭大成功のかげに、たくさんの人たちの汗があり

組み立てる汗

テントを張る汗

担ぐ汗



ふるまう汗

踊る汗

氷を運ぶ汗

テントの中の汗

楽しんでもらう汗

トウモロコシを焼く汗

焼きそば作りの汗

後片付けの汗

花を書く汗

今年は、プログラムの中に「ふるさと」を織り込んで、東北を応援するとともに、わがふるさと荒牧を大切に思う心を深めようと試みましたが、いかがでしたか。ご協力ありがとうございました。

ともしびコーラスの皆さんが、「ふるさと」と、東北復興支援ソング「花は咲く」を歌いました

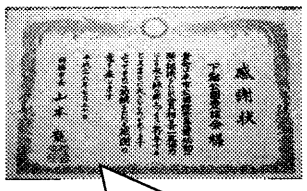
東北復興を願う新しい踊り「ふるさとは今も変わらず」を、みんなで覚え、心を込めて踊りました

関口自治会長

夜の練習会です

子供達も踊ってくれました

公園愛護会が表彰されました



おめでとうございます！

このたび公園愛護会の日頃の功績が認められ、前橋市長より次の方々に感謝状が授与されました。

◎団体表彰（市長表彰）
・下宿公園愛護会（会長：今井昇）
・荒牧中央公園愛護会（会長：小泉勲）

◎公園緑地愛護会連合会長表彰（功労者）
・石井浩三（広瀬河畔下宿遊歩道愛護会）
・別所郁雄（下宿愛護会）
・古谷秋雄（荒牧中央愛護会）

下宿公園の活動の様子

感動の「地域ふれあいコンサート」　長寿会主催

ジリジリする暑さの中、８月６日（水）、視力障害を乗り越えて素晴らしい音楽活動をしている『泉荘パラダイス・フレンド』を公民館に迎えて、コンサートが開かれました。５人の方が、11曲を演奏してくれましたが、どれも本格的で、聴いてる方が、思わず曲にのって手拍子をしたり歌を口ずさんだり会場が一体となった素晴らしいコンサートでした。

♪　春を愛する人は～

いいね～

アンコール！

「住み良い町」にするために

あなたにしてほしいこと

お願いコーナー

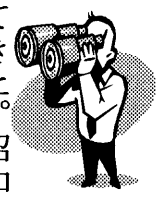
その４

町内運動会に参加してね

９月７日、荒牧小です
お待ちしてますよ～

荒牧まちかどたんけん・33

前橋大空襲と荒牧町

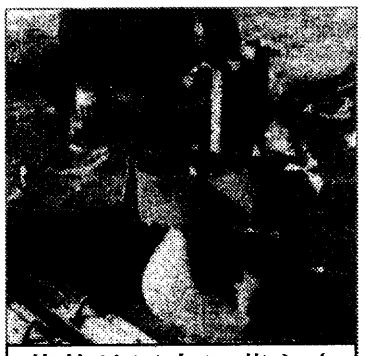


今年もまた屈辱的な８月15日が巡ってきた。昭和20年８月15日以来、既に69回目の終戦記念日である。

玉音放送で終戦を告げられた日、文字通り日本全土およびこの前橋市の中心部も全て焦土と化していた。昭和16年12月８日の大東亜戦争（第二次世界大戦）勃発以来、当初１年位は米軍を圧倒していたが、早くも翌17年４月18日航空母艦から飛び立ったノースアメリカンＢ25爆撃機により、東京・名古屋の大都市が初空襲を受け驚かされた。この後は圧倒的な物量作戦と日本の戦術・戦略の手違いにより、悲惨な敗戦となったのであります。

昭和39年３月31日付発行の「戦災と復興（前橋市）」と昭和16年４月17日付発行の「岩神風土記」から抜粋すると、「・・・前橋市には19年12月23日に、当時の超大型爆撃機が初来襲したが幸いに被害は無かった。しかし、20年７月10日艦載機約70機の編隊が来襲し、前橋市は激しい機銃掃射が繰り返され、ついに死者２名、半壊家屋10戸の被害が生じた。この時はグラマン・ロッキードであった。次いで７月30日には16機の艦載機による襲撃を受け、市内では死者１人、南橋地区では死者５人、重傷者２人、小火災１戸等の被害が生じた。

そして終戦のわずか10日前運命の８月５日を迎えた。この日はよく晴れた蒸し暑い日であった。陽がとっぷりと暮れた午後９時けたたましくサイレンが鳴った。92機のＢ29大型爆撃機による１時間15分におよぶ本格的な前橋への猛爆であった。



荒牧地区内に落とされた焼夷弾の残骸

戦後の米軍からの記録によると、この夜市内に落とされたのは焼夷弾など各種の爆弾の総量は７２３．８トンという膨大な量であった。その結果死者５３５人重軽傷者６００人、全半焼家屋１万１千５１８戸となり、市内を一変させた。燃え上がる炎は天をも焦がすような勢いで、かなり遠くの市町村からも見えた。市内は阿鼻叫喚の巷と化し、闇とあいにく降り出した雨の中を人々は必死に逃げ惑った・・・」

さて、先輩方の話によると、荒牧町内への影響も大きく夥しい人々が下小出や上小出方面から旧沼田街道を辿って夢中で避難してきたと言う。当時は広い蚕室用の部屋を備えた農家が多かった。市内の住人らしき人々が火と雨を避け、ものも言わずに飛び込んできた。家中が人で溢れ、家人も入れない状況もあったと言う。逃げて来た人々は赤く染まった我が家の方向をただじっと凝視していた。

荒牧町区内にも相当数の防空壕はあったが家人や隣人で溢れ、中に入れてくれ、いやもう入れないと言う押し問答が繰り返されたという。確かに荒牧町内は住宅こそ焼けなかったが、市内同様８月５日の夜は相当の混乱に陥った。町の先輩方は当時のことを、まるで昨日のようにその状況を思い出すと言っている。

（赤松　昭光）

このあたりの箱型水路にも多くの人が逃げ込んだ

旧荒牧神社付近にも防空壕があり、桃川小の兵士達も退避した